

幻のごとし、"HORIZON'" 創刊号

鬼塚, 敬一
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/6791157>

出版情報 : 九大英文学. 50, pp.475-477, 2008-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



幻のごとし、“HORIZON” 創刊号

鬼塚 敬一

1960 (昭和 35) 年も残すところ後 1 日となった師走 30 日、現在の『九大英文学』の始祖とも言うべき“Horizon”が創刊される運びとなった。Cairn 第 1 号とも成るべき筈だった創刊号は実は、今では殆ど誰知ることのないこの“Horizon” No. 1 だったのだ。このため、Cairn には第 1 号は無く、第 2 号から始まっている理由がお判り頂けると思う。実は Horizon 創刊の翌年、『ほらいずん』という誌名が国内にすでに在ることが判明、次号は、Horizon を Cairn に改称、Cairn 2 号 (旧 Horizon) として公刊された次第。Cairn はその後 30 号まで続き、31 号より『九大英文学』に引き継がれ、いよいよ通算 50 号を目前にしているとのこと。この慶賀すべき記念号のために、Horizon の出生にまつわるくさぐさのことを半世紀も昔の記憶をたぐりながら綴ってみることにする。

大学の学生増、特に理系学生の大増募が始まるのは 1970 年代に入ってからではなかったかと記憶する。言換えれば、Horizon 創刊の頃は、大学の数も少なく、戦後発足した「新制大学」が 11、2 歳になったばかり。大学院なども現今のような状況からは程遠く、修士・博士の両課程がまだ耳新しい頃のことである。全国的にも英文関係の大学院など未だ少なく、確か山口以西では、国公立大・私学も含めて九大だけではなかったかと思う。

当時の英文科 (大学院を含む) 主任教授は、前川俊一先生であり、毛利可信先生が助教授であった。昭和 30 年代の末頃までは、殆ど大学院 (修士) を終了しても大学就職のアテはなく、九大でも大学院終了後高校で教鞭をとるというのが多かった。

1960 年頃すでに、院生、卒業生のためのかなり立派な研究発表の場が東大、京大などには存在しており、私共もなんとかあれに似たようなものを得たいものと心ひそかに熱望していた。しかし一部に、英語の古典も碌に読めずに、学術誌まがいの機関誌をもつことには、かなりの心理的葛藤もあった。それでも、＜卒論＞で、論文らしきものを味わった私たち院生や卒業生たちは、＜修論＞へ向けて、ひたすらにあるテーマを求めて勉学し、追求して行かんとする情熱と意気込みだけは抱いていたように思う。

このようなムードが醸されつつあった折しも前川先生から、現今では教授推薦だけではどこの大学もなかなか採用してくれない。なにかこちらの推薦を裏打ちするようなく公刊された論文＞のようなものがあれば、薦す側としては本当に助かるのだが...というニュアンスのことを雑談の折に耳にした。かような状況下、院生のなかでも小生が修論を除いて必要単位も取り終え、院生 3 年目を送っている身で、かなり自由時間に恵まれていた。このせいもあり、**Horizon** 出生に際しては小生がかなり独断専行的に関わったような気がする。勿論、周囲の人々に意見や助言を聴いてまわった記憶はあるが、大方の意向は機関誌の必要性には全面賛成で、誰か暇な奴が創刊の雑務をやれというのがその時の圧倒的な「空気」であった。かくして **Horizon** の名づけ親も小生で、殆ど頭に浮んできたいくつかの誌名候補の内から最も気に入ったものを選びとったというのが実情である。そのとき浮かんだ候補の中に、残念ながら **Cairn** はなかった。

創刊号の計画を発表するや、すぐさま 8 名から執筆の申出があった。その数の多さに内心びっくりした。かくして後は、発刊費用を出来る限り切り詰めるべく工夫した。レフリー無し、タイプ印刷、発行部数約 200、執筆は 400 字詰 30 枚を目安、費用は執筆者 8 名で均等負担...という具合である。全費用の額が結局いくらであったか正確には憶えていない。分担額は（院生の奨学金が月額 3 千円程の頃）恐らく 5 千円ほどでなかったかと憶う。

しかし、これでは諸大学への送送料等など諸費用のすべてを到底カバ

一出来なかった。そのためもあるうか、創刊号のために前川先生よりかなりの額の支援金を贈られることにもなったと記憶する。当時の前川先生のご心境、如何ばかりであったろうかと、今更のように憶測するのみである。